



# 百鬼



百編の詩集

深沢 幸弘

## コーラを買う

---

道端に黄色い花が咲く

小さな花卉

道中を黄色い人が行く

大きな話し声

中の一人が赤いと言う

なるほど

花は赤いのだ

別の一人が返す

どうやら花は青いらしい

揃えて口を開く

そこに花など無い

道端に黄色い花が咲く

道中には誰もいない

萼を掠め

花の根元に百円玉を埋める

親指と人差し指を伸ばして

百円玉を埋める

道端に黄色い花が咲く

コーラを買うのは諦めよう

## クラスター家族

---

分散に失敗したクラスター爆弾が落ちた音に近かった  
僕は聞いた事無いけどね

中空で一家離散するはずだったのに  
末の子が寂しがるから  
家族揃って落ちてきたんだ

クラスター家族はよく燃える  
僕は見た事無いけどね

もたもたしていたら  
あっという間に火の海だ  
急いでここから逃げ出さなくちゃ

でも裸足じゃ危ないな  
それなら下駄だけ履いて行こう  
紅い鼻緒のあなたの下駄と  
天狗に貰った一本歯  
右と左に履いて行こう

それなのに  
それなのに

落ちてきたのは君なのか  
野宿の季節には少し早いぞ  
今すぐ起きて帰りなさい

そんな関節を失くしたみたいな動き方をして  
まったく君は困った奴だ

僕はてっきり  
道真様でも降りて来たのかと  
慌ててお臍を隠したもんだから  
薬指の爪でお臍を引っ搔いてしまったよ

見てみる

お臍の穴がポツカリと口を開いている

もう少ししたら

外の明りに誘われて

奴等が次々出てくるぞ

愛くるしい仕草で出てくるぞ

見たいと言ってもそれは駄目だ

君は今すぐ帰りなさい

今度はもっと

静かに落ちてくるんだぞ

ほらほら早く

お臍の奥から聞こえ始めた

ニャーとか

ニーとか

ニアニアだとか

急がなければ出てくるぞ

違う違う

君が言うのは猫だろう

奴等は違うさ

いいから早く帰りなさい

ニャーの腹には南瓜が実る

ニーの南瓜は中身が空で

ニアニア詰め込む焼夷弾

クラスター家族はよく燃える

僕は見た事無いけどね

## 種蒔き男

---

種を蒔く男の話しをしよう

あいつは物静かな奴だった  
あいつは誰にでも優しい笑顔を見せていた  
あいつは平均台を歩くのが上手かった  
あいつは一人っ子だった  
あいつは牛乳が苦手な事を隠していた  
あいつは鎖骨の下の黒子に誇りを持っていた  
あいつは左利きだ  
あいつの出席番号は14番  
あいつの目は誰の視線とも重ならなかった  
あいつの母は赤土で  
あいつの父は馬鍬の右から五番目の歯  
あいつはいつでも素足で走る

あいつが種を蒔くと  
あいつは気が触れたのだと  
あいつの周りが噂した

あいつが種を蒔き続けると  
あいつは放っておこうと  
あいつの周りは静かになった

あいつが数年蒔いたなら  
あいつは何だか恐ろしいと  
あいつの周りは無人になった

あいつは無人の世界に種を蒔く  
あいつの種が芽を吹いて  
あいつの林が育ち出す

あいつは林を生み出した  
あいつは立派な男だと  
あいつの周りが騒ぎ出す  
あいつに集まる賞賛に

あいつは静かに微笑んだ

種を蒔く男の話しをしよう

あいつの林の奥深く

あいつの体は揺れていた

あいつの腕は垂れ下がり

あいつの首は項垂れて

あいつの体は揺れていた

あいつが林を作ったかって

あいつは死に場を作っただけさ

中天を過ぎた太陽を背に  
影よりも黒い顔でケラケラと笑いながら  
Sが物干し台から私を招く

「ここへ上がってきなさいな」  
「素敵なものが見えるから」

まるで骨が無いかのよう  
それは柔らかな手招きで

意を決して玄関へ踏み込むと  
上がり框に蜘蛛が寝ている  
起こしては可哀想だから  
息を殺して跨ぎ越す

しかし蜘蛛よ  
お前は八つの目のうち  
左端の一つだけ薄目を開けて  
私の動きを観察していたな  
してやったりと思うなよ  
気付かぬ振りはお互い様だ

廊下を進むと  
やがて階段が現れた  
見上げれば  
遙かな先に光が見える

一足踏んだら日が落ちた  
二足踏んだら夜が明けた  
次を進めば豪雨が起こり  
瀑布と化した階段を  
百歳掛けて登り切る

物干し台には  
ケラケラ聞こえる笑い声

取り込み忘れた  
衣紋掛けが四つ  
Sの真似してケラケラ笑う

「ここへ上がってきなさいな」  
「素敵なものが見えるから」

私もSの真似をする



どこまでも続く晴天は  
赤色と紫色が混じり合う時分になって  
わずかな霞が息づいていた事を教えてくれた

遠景に望む山々の稜線はくっきりしている  
しかしその上には赤を含んだ灰色がぼんやりと漂っていた

そしてさらに  
その仄赤い霞の上方から  
富士のシルエットが  
頭だけを覗かせている

思わず踏み出す数歩  
すると  
足に冷たさが沁み込んだ

富士と私の間を海が隔てていた  
初夏の潮はまだ冷える  
それでも足元の砂が引く波に溶け出すと  
冷たさも忘れて  
足裏に伝わる感触を楽しんだ

而して時を費やす  
赤色が紫色に凌駕され  
富士の姿も見えなくなった

さて  
見えなくなれば恋しいもので  
私は再び富士が顔を出すまで  
その場を離れる事が出来なくなった

まだまだ宵の口である  
私は覚悟を決めねばならぬ

このまま砂上に在らねば

聳る富士と出会えはすまい  
しかし足元の砂は  
波が寄せ  
波が引き  
次第次第に崩れては  
次第次第に私を埋める

私は覚悟を決めねばならぬ

悩む内にも波は仕事を繰り返す  
夜陰に動き出す水際の何かが  
見慣れぬ私に絡みついた

許りか  
私を登ってくるものもある  
細かな無数の足を蠕動させ  
迷い無く登ってくる  
くすぐったい感覚  
そして薄気味悪い不安

私は覚悟を決めねばならぬ

ふむ  
無理は良くない  
そう思い体を這い上げるものを振り払おうとした  
然るに腕が動かない

悩み迷う間  
生真面目な波の仕事は  
私を首まですっきり  
砂の下へと埋めてしまったらしい

気づく途端に  
体を這い回るものが  
その数を増したように感じられた

朝日の訪れはまだ先である

私は覚悟を決めねばならぬ

## 尺貫法の空言

---

暗いな

暗いな

火を灯そう

暗いと不平を言うよりも

進んで灯りを点けましょうって

どこかの誰かも言っていた

暗いな

暗いな

懐さぐる

マッチがあるけど

二本きり

しかもこいつは

ブックマッチで

その上とても年代品

表側に印刷されたのは

名前も読めない安キャバレー

すっかり剥げ落ち

情緒も無いや

これじゃ燃えるか

気が気じゃない

暗いな

暗いな

火を灯そう

マッチの炎は小さい癖に

刹那の強さに燃え遊ぶ

ほんの少しだけ待ってくれ

君をキャンドルに移すから

語る吐息に揺さぶられ

炎は一人で夢になる

暗いな

暗いな

火を灯そう

ブックマッチはあと一本

鼓動と吐息が悠久になる

## ボラの日

---

夜が白む

然れど視界は広がらず

縁の向うは霧の中

黒い闇から白い闇

おぼこ娘の白霧は

やがて煙雨の紅差して

鯨背銀杏に濡れ染まり

午を過ぎれば篠突く雨と

しとどの詰まりは

とどしとど

冷えたる飯を喰み乍ら

墨に暮れ行く庭先に

撥ねる雫の想いを吸って

重く凭れる帷子の

両の袖をば引き千切る

誰か在らん

袖を縫うては

呉れまいか

## 友愛の育み方

---

名を紙切り丸と言う

金魚鉢の中の水草を指し  
彼は私にそう言った  
そして続けて  
その名の由来を語り出す

私は黙って聞いていた  
けれども  
どうして紙切り丸になったのか  
聞き終わってもよく分からなかった

彼は床の間の花器を示し  
今度は一言  
カナデコと放つ

私は口の中で反復する  
ところが  
反復し終わらない内に  
彼がまた言葉を繋いだ

「奏でるに子供の子だ」

なるほど  
それでカナデコと読ますのか  
しかし  
名の由来だけは  
やっぱり分からなかった

それから三昼夜  
彼は休む事なく  
住まいの隅々まで  
私に紹介してくれた  
それでも一つとして  
名の由来を理解する事はできなかった

水甕(これは「倒太夫(さかしまたゆう)」と言うらしい)のそばに団扇が有る

その名も

七つの星でナナホシ

案の定

名の由来はよく分からない

分からないが

これで全ての紹介が終わった事になる

彼は満足そうに息を吐いた

そして私は

未だ彼の名を知らない



# 泥

---

この道を行くのかい  
それじゃあ明日まで待ちなさい

腕っ節の問題じゃない  
腕より脚だ

健脚云々でもない  
脚より心さ

臆病かどうかは関係無い  
心より命だよ

お前さん  
泥の中を歩いた事があるかい  
その辺の泥濘を考えちゃ駄目だ  
腰やら胸やらそれ以上  
沈み込んでしまうような  
深い深い泥の中さ

足を差すなら柔らかく  
足を抜くにはがっちりと

一足毎に消耗するが  
沈み行くから休むもできぬ  
だからほら  
明日の朝日を待ちなさい

この先にそんな泥沼があるのかって

ふふん  
地図を見たって描かれちゃいないよ

嘘と思うのは構わんが  
それでも明日を待ちなさい

お前さんの顔を見れば分かる事さ

## プロセニアム

---

夕方四時  
約束には早い

斜向かいの家で  
またヴァイオリンが歌う  
近所の野良は  
この歌が嫌いだ

程無くして  
豆腐屋の喇叭が加わる  
不思議と調子が揃う

ところへ  
裏の親父が帰宅する  
嬢と二人で何やら喚き  
音に厚みが増す

隣家の厨に気配がする  
俎と庖丁の戦が始まった

重なる音  
高まる音  
そして次第に暮れる空

夕方四時  
幕は直に開く

## 落ち着いた空

---

凧の時間は短い  
だから  
その短い時間には  
できるだけたくさんの  
心を刻もう

少し照れくさい事も  
思い切って記そう  
凧の時間に語らなければ  
きっと  
いつまでも闇のままだ

迷っていたら  
またすぐに時化が来る

凧の時間は短いから  
思いを隠さず吐き出そう  
誰かがそれを  
蛤吐息と思ったとして  
その眼に映った瞬間が  
真実ならばそれで良い

だから君よ  
この爽やかな青色を  
どうか疑わないでくれ

天地を返した靴下に  
二本並んだ青い線  
笑顔の在処を忘れても  
青色だけは真実だ

脚が消えたは  
天か地か  
それでも青さを刻まれた  
靴下ばかりは本物だ

凧の時間の真実だ

## 郭公が鳴く

---

ワーズワースを読んだ時  
ページの端で人差し指を切った  
自然を讃えた男からの  
これは復讐なのだ

それからというもの  
事あるごとに  
人差し指が騒ぎ出す

三日月型の傷口を  
パクパクと動かして  
近代化した世の中を嘆く

あんまり五月蠅いから  
湖に連れて行った  
ところが  
静かになるところか  
傷の内から歯を剥いて  
今まで以上に喚き出す

そうか  
この湖は貯水池だ  
ダムの気配に気付いたな

私は何だか面倒になり  
怒れる人差し指に  
絆創膏を巻いた

しばらくムゴムゴ言っていたが  
家に帰る頃には  
すっかり静かになった

私はこうして  
初めての殺人を犯したのだ

飾り気のない木匣は  
茶色を通り越し  
ほとんど黒だ  
それでいて  
温もりはある

触れるとまるで  
指に吸い付くような感触

木匣の蓋は  
とても柔らかく開いた

言葉を選ぶ私

あなたは匣の中で  
何を為さっているのです

匣の人は  
その時はじめて  
私に気付く

驚いたように目を開き  
その後  
口の端で小さく笑う  
右腕を緩慢に動かし  
キャペリンを脱ぐ

頭は薬缶である  
女性だと思っていた私は  
たいそう驚いた  
これは帽子の所為である

薬缶は呷から煙管を出し  
旨そうに一服つけた

ふうっと吐き出す薄い煙が  
天井を無くした匣から  
ゆらりと立ち上り  
鼻先を掠める

私は小さく咳き込んだ

薬缶がまた  
口の端で笑う  
鼻持ちならん態度だ

だが  
お陰で薬缶が匣の中にいる理由も  
大体分かった



## ミトラの約束

---

やけに暑いと思ったら  
玄関前に  
太陽が来ている

約束は今日だったか  
明日ではなかったか

思案する内  
果たして呼び鈴が鳴る

ちりりん

俄に涼しい心持ちとなるが  
半呼吸と続かない

飲み込む空気が燃える  
戸車の音も茹だる  
迎える顔が干上がる

客間へ通して茶を入れると  
しかし太陽はこれを固辞した  
これから  
急いで西へ向かうのだと  
ぎらぎら話す

いつも通りではないか

そう思ったのを読まれたのか  
今度は少し長くなるのだと  
太陽はじりじり重ねた

今日現れたのは  
その暇乞いのつもりらしい

どのくらい行っているのか

その問い掛けが来る事を  
恐らく予測していたのだろう  
かんかん笑って  
太陽は出て行った

五月闇が明ける頃  
土産を持つと言い残して

今宵は月も出ぬさうな

---

おかえりなさい  
よくぞ帰って下さいました

まずは足でも洗いましょう  
おや  
随分と毛が濃くなりましたのですね  
爪もすっかり伸びきって  
あとで削って差し上げますね

少し背が伸びましたか  
言葉が幾分  
高い所から降りてくるようです  
でも声は  
少し低くなりましたね  
喉がよく震えていらっしゃる

それでは  
お召し替えを致しましょう  
どうされました  
身頃は左右反対です  
せっかく帰って下さったのに  
縁起でもありません

とにかく  
卓へお着き下さいな  
豪華な物はありませんが  
どうぞ懐かしき味わいを

あらあら  
お箸は右に  
嫌ですよ  
ぎっちょじゃあるまいし

ははあ  
さては左党の掛け詞

すぐにお酒を持ちましょう

ところでそれは

お仲間内での流行ですか

いえ

瞳のお色の事ですよ

うっすら青みを帯びていて

南方の空を思わせます

すみません

南の話しはやめましょう

私が悪うございました

だからどうか

お気を鎮めて下さいな

そして一言

名前をお呼び下さい

それは亡くなった

伯母の名前ではありませんか

意地悪なさらずに

私の名を

ああ

お慕い致して居ります

本当に

よくぞ帰って下さいました

# 唯

---

柿の木は  
翼が欲しいと思った

花咲く夏には  
関心遠く  
花散る秋こそ  
持て囃される

枝に集まる  
鳥の歌  
誘われ近付く  
足の音

渋かろう  
甘かろう  
悩み実をもぐ  
彼の方の声

柿の木は  
根を張る喜びを知った

影薄くとも  
徒花に非ず  
秋更けるなら  
実をつけよう

翌る歳  
花咲く夏の  
その頃に  
遠い島へと  
彼の方は去る

古き御仁の  
お歌を借りて  
秋な忘れそ

言い残し  
遠い島へと  
彼の方は去る

白の季節が巡る度  
言い付けに添って  
実を結ぶ  
愛でる人なき  
この庭で  
鳥の歌だけ  
変わらない

柿の木は  
己の時の長さを憎んだ

枝に戯る  
羽搏きが  
世代を幾つも  
越えた頃  
作り笑いの  
面をつけて  
見知らぬ人が  
やって来る

柿の木は  
倒れてしまおうと決めた  
そして最後に  
翼が欲しいと思った

## 虚仮と苔

---

石鉢は雨滴の作である  
幼少より見慣れた  
苔生す石鉢は  
父の幼き頃より  
石鉢である

父は父に尋ねた  
すると石鉢は  
父の幼き頃  
既に石鉢だったと  
父は父から聞かされた

父が尋ねた父は  
父が子供の折から  
石鉢であったと  
やはり父から聞いた

どれほどの父が尋ねても  
石鉢は石鉢であった

滴と落ち  
石に拉ぐ雨露の  
長き仕事を想い  
私は一言  
慰労の言葉を投げ掛けた

それから程無くして  
石鉢は割れてしまった

命の意味とは  
存外そんなものかもしれない

## 号哭

---

雷鳴は優しい

怯える肩を引き寄せた

いつかの夢を語るから



## 一握じゃぱん

---

メロンパンに  
高級メロンを使うと  
メロンパンが旨いんじゃない  
それはメロンが旨いんだ  
アニメの人がそう言った

しかしそれでも  
旨い事には違いない

東の郷で  
ビーフシチューを作ったら  
思い掛けずに  
肉じゃがが生まれたという  
まことしやかな  
都市伝説もある

なるほど  
料理とはそういうものか

四海の味覚を  
選り集め  
厨は万国博覧会  
袖を捲って披露する  
今宵を盛りの  
庖丁儀式

さてもお味は  
腥い

ちっと手を見る  
なるほど  
料理とはそういうものか

## 膝栗毛

---

目が覚めると  
戸板の隙から  
細い光が伸び  
日のある時間を示す

身を起こすを厭い  
天井を眺め  
再び眠りに誘われようとした時  
差し込む光が  
僅かに揺れた

戸板の向うを  
何者かが通ったのだろう  
そう思った途端  
眠りの門扉は  
門を下ろしてしまった

床を辞し  
徐ら衣を整える  
酒をやった訳でもないのに  
何だか少し  
フラフラする

戸板の光がまた揺れた  
次いで  
控え目な話し声が聞こえる  
どうやら  
一人ではないようだ

二歩も動かせば  
すぐに戸板に取り付ける  
けれども不思議な酩酊は  
決まって二歩目を  
他方へ逸らす  
あと一歩分だけ

ギリギリ戸板に届かないから  
已む無く次の足を出す  
しかし二歩目が  
また逸れる

戸板の向うは  
何やら少し  
楽しそうな気配がする  
だが会話の中身は  
一向に判別出来ない

開けねばならぬ  
開けねばならぬ

思う内  
光の筋は橙になり  
あれよあれよと  
弱くなる

宵が広がり  
光が消えて  
外の気配も  
いなくなり  
漸く戸板を諦めた

歩き始めと  
歩き終わりと  
どちらも同じ畳の上  
然れど旅路にあったなら  
戸塚の宿にも入れたらうに  
戯れた笑いで  
枕を飾り  
新たな朝にも  
また歩く

凡そ半月  
畳の景色は同じでも

胸の内には  
京の三条

然ればとて  
戸板の向うは窺えぬ

## さとり

---

大きな風呂敷に  
四角い何かを包み  
大儀そうに背へ負うた  
齢八十程の女が  
辻を左へ折れて行く

所用が無ければ  
手を貸してやろうと  
そんな気も起きたかもしれない

すると傍らで  
随伴の小僧が  
「ひとつ」  
と声を上げた

友人宅の前に差し掛かると  
その家の末の妹が  
西洋の御婦人を  
白墨で路面に描いている

この子が生まれたのは  
昨日の事ではなかったろうか  
他所の子の成長とは  
誠に早いものだ

「ふたつ」

小僧が無表情に数える

そう言えばこの小僧は  
一体いつから  
こうして付き従っているのだろう

どうにも思い出せず  
小僧に尋ねようとしたが

それは余り薄情な気がして  
思い留まる事にした

「みつつ」

数える小僧の声が  
幽かに嘲笑めいて聞こえた

八丁も行くと  
小僧の勘定が  
到頭十まで行き着いた

ほう  
十まで数えられるのか

感心すると  
小僧は少し照れながら返す

「じゅういち」

これはのんびりして居られぬ  
思う所へ  
丁度飴屋が行き違う  
その袖を引き  
小僧に一つ買い与える

次の八丁を進む間  
小僧は一つも数えなかった

## 一里塚

---

右を繋ぐ  
節くれ立って  
ごつごつとした  
暖かい左がある

何十年と  
右を預けた  
確かな左がある

左で右を繋ぐ  
右の左と繋ぐ

右の視線が  
丸みを帯びて  
嫁いだあの子に  
話し掛ける

右を強く繋ぐ  
こどもの様に繋ぐ  
夕焼け小焼けと  
歌いながら

ある時は  
知らない娘に  
囁いた

右を強く繋ぐ  
小さな悵気を  
楽しみながら

またある日  
疾うに隠れた  
母親を呼ぶ

右を強く繋ぐ

ここに居ると  
微笑みながら

右を繋ぐ  
節くれ立って  
ごつごつとした  
暖かい左がある

何十年と  
右を預けた  
確かな左がある

右の左が  
記憶を運ぶ  
左で右から  
想いを包む

右は今日  
誰を左に散歩する  
左で右を繋ぐのは  
いつの心の空でしょや

いつかまた  
私が左に  
なれますか



## 理の果て

---

飛んでいるなんて  
そんな風には  
思わないでくれたまえ

かつて私も  
飛んでいるものと  
そう思っていた  
だからきっと  
あなたもきっと  
飛んでいるのだと  
そう思ってしまうだろう

私はただ  
知りたいと思ったのだ  
飛んでいるとは  
どういう気分なのだろうか  
私はただ  
それが知りたかったのだ

けれども  
飛んでいる人は皆  
私の問いに答えてくれない

飛んだ後には  
口を閉ざし  
飛び立つ前には  
目を逸らす  
憐れむ様な  
顔をする  
それを知るには  
飛ぶしかないのだ

しかしどうか  
飛んでいるとだけは  
思わないでくれたまえ

思えばいつか  
飛びたくなる  
そしてその時  
願うのだ  
飛んでいるなんて  
思うなど

私はいま  
飛んでいる

けれどあなたよ  
飛んでいるなんて  
そんな風には  
思わないでくれたまえ

絵画を観て

良い画だと言われる事

それを喜ぶ人なのか

幾らだと問われる事

それを喜ぶ人なのか

その違いと

それぞれを口にする時については

知っていた筈だ

無知故ならば

或いは仕方が無い

しかし知っている筈の者が

それを忘れた時ほど

見苦しいものはない

心は移ろうもの

けれども

移ろいに任せてはいけない

そういう部分もあるのだ

己の変化で

景色は変わる

でもそれは

着眼点の変化に過ぎない

あなたの見方が変わろうと

母と認めた相手が

母である事に変わりはない

父と仰いだ相手が

父でないなど無い

広い世界を求めた先で

矮小な人物になど

成らないでおくれ

あなたはあなた  
その事に  
嘘も偽りも  
無いのだから

## 麻の中の蓬、深き酒の香に酔う

---

嘔吐いて起きる

枕元には洗面器  
常習なのだと気付く

気付いてしまえば  
穏やかなもので  
胸を搔き鳴らす不快感も  
行きつ戻りつの苦しさも  
全てが他人事に感じられる

そしてまた  
命の在る事を知る

私には早く  
捨ててしまいたいものがある  
捨てられないから  
夜毎こうして  
吐き出してしまおう

騒がしい妄想も  
冷やかな本心も  
退っ引きならない人恋しさも  
己以外へのゼノフォビアも  
全てが心臓に起因するのだと  
疾っくの昔に  
分かっているのに

一つ脈打てば  
交した言葉が巡る  
二つ脈打てば  
無言の想いを拾う  
三つ脈打てば  
想いの背中が見えて  
四つを打つなら

沈黙の優しさを強いる

吐瀉物が  
黄色から黒色に変わる頃  
人よりも尚  
人に敏感な心奥を憎み  
ヒロイズムに暮れ泥む  
自己陶醉を探す

旭日よ去れ  
明けねば君を  
求めもしまい

## 鏡の国の乙女

---

嘘とは  
人間に許された  
ひとつの表現方法

だからこそ  
自覚の無い嘘は  
控えなければならない

あるいは  
忘却を以て  
嘘から逃れてもいけない

嘘には期限がある  
終生吐き通すもの  
一息の内に明かすもの  
長短の差こそあれ  
嘘には期限がある  
忘れた振りも  
目を逸らす事も  
期限から逃れる方策には  
決して成り得ない

背負う覚悟無くして  
嘘を吐いてはならない  
なぜなら嘘は  
本心を見詰める事と  
意味を同じくするのだから

たとえば  
変容という言葉で  
誤魔化したとしても  
嘘の真実が  
胸中から消える事は無いのだ

嘘はとても正直だから

来し方と行く末を分かつ為  
方便を用いるとしても  
それは嘘ではないと叫んでしまう

膝を付き合わせ  
胸襟を開き  
嘘の言い分に耳を貸そう  
それは畢竟  
真心との対話に相違無い



## 写真

---

何もかも  
あの日のままに

書きかけのお話しも  
文机の上にそのまま  
いえ  
風に踊らぬ様に  
文鎮だけは載せました

お戻りまで  
この屋の全ての時を止め  
お待ちしようと  
決めたのです

焦がれ待つ時を  
動かぬ時へと封じました  
それは一葉の  
写真の様に  
今を切り取り  
待たんが為に

ですからほら  
出立の朝  
慌てて倒した花差しが  
そちらで変わらず  
砕けたままです

三度三度のお食事も  
二人分にて拵えました  
夜毎夜毎の営みも  
二人分にて私語きました  
一人待つとて  
変わらぬ日々を

姿無き待ち人と

変わらぬ言葉を交しました

お出掛けの日の  
あの時のまま  
敷居を再び  
跨いだならば  
時の続きが働く様に  
あの日のままで  
お待ちしました

ご覧ください  
私とても  
老いを締め出し  
あの朝のまま

お待ちしました  
待つと思わぬままに  
お待ちしたのです  
長い長い  
今でしたね

おかえりなさい  
ところであなたは  
だれですか

## 盲目月夜

---

角砂糖をあげよう  
それが君に許された  
たった一つの  
ステイタスだ

ハンケチに包み  
優しく運ぶんだ  
下宿に着いたら  
そろりと開き  
月に透かして見てみなよ

部屋の灯りは  
消しておけ  
点ければ奴等が  
踏み込んでくる  
毛布を被って  
こそりとやれよ

なんだって  
もう一つ寄越せって

それはだめだ  
さっきのが最後  
そう  
最後の一つだよ

だから言ったじゃないか  
君に許された  
たった一つの  
ステイタスだって

呆れた奴だね  
アブサンなんか  
どこで見つけてきたんだい

やれやれ

君にはもう

居場所なんて無いんだな

## カラス

---

好きな色を選んで良いよ

言われてボクは  
藍色を選んだ

藍色はアノヒトの色  
アノヒトの着物の色  
藍の着物が通れば  
みんなアノヒトに見える

他の色もどうぞ

言われてボクは  
茜色を選んだ

茜色はアノヒトの色  
アノヒトの眼差しの色  
茜の夕暮れには  
いつもアノヒトと見つめ合える

もっともっと  
いくつ選んでも良いよ

言われてボクは  
色んなアノヒトを集めた

アノヒトの頬の色  
アノヒトの髪の色  
アノヒトの吐息の色  
アノヒトの喜びの色  
アノヒトには  
ほんとうにたくさん色があるんだ

たくさんアノヒトの色は  
だけどすべてが混ざり合い

けどすべてが重なり合い  
漆の黒になってしまった

黒はアノヒトの色じゃない

ボクが黒色を愛するのは  
つまりこういうワケさ

なぞなぞ

---

下は大火事

上は洪水

これ何だ

答えは傘差す私です

激情家の雨が

明け透けに叫ぶから

私はとても

花火が見たくなったのです

蛇の目は家に

一張りきり

お骨が一本

折れていて

四十七士と呼んでいます

忠臣達に守られて

紙縫りのおしりに

付け火を一つ

長手の端から

牡丹が咲いて

花瓣が私の胸を焼き

ほどなく椿の真似をします

涙が出ます

はらはらと零れ落ちます

下は大火事

上は洪水

答えは私

ひとりです

## Amour

---

さあ  
出掛けようじゃないか

こんなによく晴れて  
風も穏やかな  
気持ちの良い日に  
なんだって  
閉め切った部屋に  
そうして座って居るんだい

恩着せがましく言うつもりはないが  
わざわざこうして  
余所行きの羽織と  
真新しいステッキ  
そしてお気に入りのパナマで  
迎えに来たのだ  
ほらほら  
腰を上げたまえ

上さんが許さないって  
だから前にも言っただろう  
オートマトンは捨てなさい



## 焦点

---

壁の中から  
ポリポリという音がする

さては鼠か  
いやしかし  
我が家のクロは  
名人である  
それが欠伸をしているのだから  
鼠ではあるまい

そうは言っても  
壁の中のポリポリは  
南京豆でも砕くような  
軽妙なポリポリを続けている

ポリポリの聞こえる  
中心を探そうと  
音が大きく聞こえる辺りに  
そっと右耳を近付けてみる

もう少し右のようだ

壁に右耳を付けたまま  
ゆっくり後退るようにして  
ポリポリを追いかける

まだ右か

すると間もなく  
踵が別の壁に突き当たる  
どうやら部屋の隅らしい

これ以上は追えない

諦めかけると

ポリポリが左の方から聞こえ始める  
同じ姿勢のまま  
今度は体の前側へと  
静かに足を踏み進める

そうして部屋の隅まで行けば  
ポリポリはまた  
右に動くのだろう  
いやそれとも  
別の壁へと移るのだろうか

もしも天井へ進んだなら  
どのようにして追えば良いだろう  
考える内に  
肝心のポリポリが  
ひどく遠い音のように  
感じられ始めた

その日は朝から落ちていた

ヒューとか  
ゴウゴウとか  
かまびすしい風の音が  
まだ眠いのに  
ムリヤリ夢から引きはがす

呪いをこめて  
マブタを開けば  
どうやら落下の途中のようだ

辺りはマックラだが  
今起きたのだから  
朝なのだろう

のどがカラカラに乾いている  
恐らく眠っている間中  
ずっと落ちていたに違いない  
いや  
そうに決まっている

落ちているなら仕方ない  
落ちるに任せ  
マズは身支度をととのえよう

テヌグイを取り出したが  
用を果たす前に  
風にあおられてしまった

ヤムヲエヌ  
目脂は袖で拭おう

ここへ至って  
ようやくカラダの目が覚めた

さっそく腹のムシが鳴く

負うた包みを慎重にほどくと

ニギリメシがふたつ

風に奪われぬように

丁寧に喰らう

腹はくちくなくなったが

落ち行く果ては

マックラでまだ見えない

ミジロギもせず落ちる

どこから飛んできたのか

トラツグミが肩にとまる

自分で何処へなりと飛べるクセに

落ち行く者で休むなど

なんとバカにした態度だろう

いやしかし

落ちているという事は

ちかづく地面や

通りすぎる風景

あるいは飛ばされたテヌグイのように

己と比べる何かがあって

はじめてそれと分かるのだから

ポツネンと中空に在る今

それは静止しているのと

同じなのかもしれない

ならばツカノマ

この身が止まり木となる事もあるのか

考え至った途端

トラツグミが飛び去り

あっという間に見えなくなる

マックラの向こうから

思い出したように  
一声サエズッタようだ

それは又エのサエズリ

不安を感じる鳴き声が  
ヨインを残して  
上の方へと遠離る  
いやまて  
鳴き声が去ったのは  
下の方ではないのか  
落ちていると思ったのは  
実は上昇しているのではないのか  
天地十方暗闇ならば  
飛ぶも落ちるも視認はできぬ

あるいはもし  
ヒューとか  
ゴウゴウとか  
かまびすしい風の音が  
カラダの移動の産物ではなく  
ただ単純に  
風が吹いているだけなのだとしたら  
いよいよもって  
止まっているという可能性も  
強くなりはしないだろうか

落ちているのか  
昇っているのか  
止まっているのか

ははあナルホド  
あの鳴き声が  
どうして又エのものとされたのか  
少し分かるような気がする

## 宴

---

秒針が五月蠅い  
のべつ喋り続けている  
おかげでちっとも眠れない  
一言文句を言ってやろう

思った矢先  
蛇口から滴る雫が  
秒針に相槌を打つ

一人語りではないのだな

両者を並べて  
苦情を申し立てる必要がある

しかし秒針は  
説教の間も喋り続け  
とうとう一言も聞き入れない

聊かうんざりして  
蛇口に向き直る  
打って変わって  
こちらは神妙にしていたが  
全ての苦言を言い渡し  
腰を浮かした瞬間  
ポツリと口を開く

それを合図に  
冷蔵庫が低く歌い出す

やれやれ  
今夜もずっと  
酒を飲まねばなるまい

## ひとりあそび

---

三歩進む  
君の音がする

振り返る  
貴方の音がする

引き返す  
御前の音がする

三十歩進む  
何も聞こえない

立ち止まる  
不安になる

胸に手を置く  
何も聞こえない

叫び出す  
何も聞こえない

走り出す  
苦しくなる

目を閉じる  
何も聞こえない

静寂とは  
斯くも騒がしい

## Alice

---

暮夜の窓

硝子には瞳

私の瞳

瞳の中を走る子供

迎える家の灯り

私の瞳の灯り

暮夜の窓

硝子は鏡

鏡の向こうには

私のいない

私の世界がある



拝啓、...様

---

先生という人へ  
私を褒めて欲しいのです

放課後の校舎を見上げると  
あの子の姿がありました  
表情は分からなかったけれど  
あの子は泣いていたのです  
私はすぐに屋上に向かいました  
今日に限って  
ハンカチを忘れてきましたが  
幸いセーラー服には  
スカーフが付いています  
あの子の涙を  
拭いてあげる事もできるでしょう

それなのに  
あの子はひどいのです

先生という人を  
あの子は慕っていたのです  
先生という人に  
想いが届かず泣いていたのです

先生という人へ  
あの子はとてもひどいのです

だから私は言いました  
そんなに辛いなら  
ここから飛んでしまえば良い

あの子は俄に泣き止んで  
言葉の意味を飲み込んでから  
そんな事はできないと言います

先生という人へ

あの子はとてもひどいのです  
だから私は  
ひとつ作戦を立てました

慰めてあげよう  
スカーフで顔を拭いてあげよう  
左手をさしのべながら  
猫撫で声を出しました  
あの子が私の手を取る刹那  
左を引きつつ  
右手であの子を押しました

あの子はふわりと浮いたのです  
水平になる体  
天へと伸びるお下げ髪  
空の声を聞き逃さないように  
襟はしっかり立ち上がり  
スカーフも  
スカートの裾も  
あの子の周りだけ  
重力が消えたみたいに  
ふわりと浮いたのです

とても長い時間  
浮いていたような気がします  
私とあの子は  
しばらく見つめ合ったままでしたから  
とても長い時間  
浮いていたように思うのです

でも私の目が乾いてきて  
痛みに負けて瞬きをした間に  
あの子は地上へ降りてしまいました  
鮭の水煮に入った  
柔らかな背骨を噛んだ時のような  
地味な着地の音でした

先生という人へ

あの子はそれでもひどいのです

下まで降りると

あの子は地べたに寝転んだまま

どうしてと聞いてきました

先生という人へ

どうしてだなんて

あの子はとてもひどいでしょう

それで私は

あの子のお下げを切りました

私のスカーフに包んで

校舎裏の焼却炉で焼きました

先生という人へ

私を褒めて欲しいのです

私を抱いて欲しいのです

## 餡ころ餅の犯罪学

---

大将はお腹を引っ込めないといけないよ

女将さんが  
搦り粉木を持って  
お尻を叩く  
ヒャッと声上げ大将が  
轆轤の上を  
クルクル走る

床几で寝ていた  
ニャアが目を開け  
髭を震わせ歌い出す

此處は御國を何百里  
此處は御國を何百里

同じ歌詞だけ  
繰り返す

いよいよ大将  
へたばって  
手足投げ出し  
転がるけれど  
轆轤はクルクル止まらない  
大の字になった大将も  
クルクルクルクル  
止まらない

此處は御國を何百里  
此處は御國を何百里

女将さん  
オラァ  
餡ころ餅が  
食いてえだ

## 玉手箱

---

頭がとても痛いんだ  
頭蓋骨と皮膚の間が  
攣ったみたいに痛いんだ  
左の蟬谷の少し上  
頭がとても痛いんだ

右足の太ももに  
深々と包丁を差し込んだのに  
やっぱり頭が痛いんだ

手足で二十の  
爪を剥いても  
どうにも頭が痛いんだ

右手を肩から  
引っこ抜いたよ  
だって僕は左利きだからね  
だけど頭が痛いんだ

去勢もしたよ  
それでも頭が痛いんだ

この際  
腹を裂いてみよう

あれ  
何だこれ  
鯛や鯉の舞い踊り  
五臓六腑は竜宮城だ  
絵にも描けない  
美しさ

頭がとても痛いのかって  
そんな昔は  
もう忘れたよ

## ベテルギウス

---

賑やかだけど  
どうしたんだい

四軒先で  
超新星爆発だって  
本当かい  
久しく聞かなかったが  
そんな近くで起こるとは  
寝耳に水ってやつだねえ

あゝ あゝ  
構いやしないよ  
上の座敷を使うと良い  
向こう七日は  
星の雨だろう  
慌ててみたって  
汽車は来ないさ  
何なら置屋に繋ぎを取ろう  
金比羅船々  
しゅらしゅしゅしゅ  
別に嫌いじゃないだろう

まあまあ  
まずは中へとお入りよ  
そんな所に突っ立ってっと  
ガンマ線にやられっちまう

休暇と思って  
のんびりするこった  
外が落ち着いたら  
汽車が復旧する前に  
爆発跡を見ておいで

なあに  
煙管なら

俺のを貸してやろう

霞を持ち寄り

きれいな雲にしてやんな

## 第四世代

---

四畳半の宇宙に  
打ち上げられた  
ハッブル宇宙望遠鏡が  
裸電球の縁に沿って  
規則正しく周回すると  
眠り方を忘れた男は  
今夜もまた  
机の上によじ登り  
調子を外して歌うのだ

押し入れの空では  
たくさんの星が  
一秒ごとに  
見知らぬ星座を作る

新たな星座が生まれるたび  
男も新たな歌を歌う

終列車が通り  
部屋が小さく喘ぐ  
窓がカタカタ鳴って  
電球も僅かに揺れる

眠り方を忘れた男は  
でんぐり返しで  
炬燵に滑り込む  
中で丸まっていた猫が  
驚いて飛び出した時  
共同廊下の真ん中で  
初鯉と戻り鯉が  
互いに泥棒猫と罵り合って  
本命の座を守ろうとしていた

流しの海に沈んだ  
タイタニック号から



錆び付いた様な  
ヴァイオリンの音が漏れる

暗い暗い夜の  
小さな冒険が始まる

## 儂む者

---

ガイン ガイン

ガイン ガイン

片眼の男が

ガイン ガイン

口唇尖らせ

ガイン ガイン

汗を拭きつつ

ジュジュジュジュジュ

片足踊りで

ガイン ガイン

精魂込めて

ガイン ガイン

誠心誠意

ガイン ガイン

迷う事無く

ジュジュジュジュジュ

熱い気持ちを

ガイン ガイン

片眼の男は名人だ

それでだあれも

近付かぬ

今日も明日も

ガイン ガイン

侘しく響く

ガイン ガイン

重ね続ける

ジュジュジュジュジュ

潰されそうでも

ガイン ガイン

誰に打ったか

語りもしない  
渡しもしないし  
取りにも来ない

だけど毎日  
ガイン ガイン

ガイン ガインの  
ジュジュジュジュ

## 形而上学的花嫁

---

狐が真っ赤な着物を纏い  
畦でコンコン泣いている

私は信田の末の者  
雲を払った晴れの日の  
嫁入り雨をば引き連れて  
桔梗に抱かれに参ります  
然れど雨滴も頬染めて  
真っ赤な雫をこぼします  
お陰でまあ  
袖を通した白無垢も  
見る見る真っ赤になりました  
こんな態では  
嫁げませぬ  
コンコンコン

それは何とも  
お気の毒

しかし私は知っている  
一山越えた向こう側  
白い浜辺の更に先  
沖で勇魚が顔を出し  
お天道様とご対面  
勇魚は一目で惚れ込んで  
脳天スパーク大興奮  
のぼせて鼻血を出したとさ

雨雨コンコン  
恋が降り  
雨雨コンコ  
嫁げない

## 鈴

---

彼は語らず  
ただ差し出した

左腕  
小さな鈴の名乗り

空気の一粒一粒に反響するように  
けれども決してうるさくはない  
木霊を返す空気の粒が  
応える側から清められていく  
真っ直ぐに響く声

とても高いが  
雑味の無い声

キンキン叫ばず  
キラキラ踊る

清々しさが広がる  
私だけが汚れている  
劣等感が迎えに来る  
夜よりも暗い蔭を広げ  
その内を白詰草で満たし  
居心地の良さを見せつけながら  
俯く私を迎えに来る

膝小僧に蜂蜜を垂らし  
好んで膝を抱くように  
甘い虚ろが立ち込める

鈴が鳴く  
頤に入り込む

いやだ  
やめて

触れないでおくれ

私はまだ

汚れていたい

彼が作る鈴

私が欲しいと願う鈴

彼が作り続ける鈴

私が触れられない鈴

彼と私だけが

永遠の正体を知っている

## 君の言葉

---

知らないんだ  
先の事なんて  
知らないんだ

望んだ未来も  
望まぬ未来も  
それならどっちも同じだね

永遠の愛も  
懐かしい恋も  
押しやりたい悲しみも  
かき消したい苦しみも

見つめた世界と  
見つめられた世界と  
どっちの世界も同じだね

それでもね  
知らないんだ  
先の事なんて  
知らないんだよ

## 無限の食卓

---

お腹が空いたと僕が言う

私も空いたと君が言う

ディナーに行こうか

ディナーに行こうよ

ハンバーグ

オムライス

和食の御膳も美味しそう

決まらないからお腹が叫ぶ

三分待ったら

ディナーにしよう

二人のお腹が

相槌を打つ



面

---

旅行かね  
違うかね  
では帰郷だね  
そうだろう

離れていたのは  
半年ほどだね

故郷へ帰るのに  
この列車を使うなら  
大抵は皆  
半年振りさ

長いようで短くて  
短いようで長くて  
半年とは  
そういう時間だが  
いずれにしても  
ご苦労様だ

おっと  
駅へと着いたかな  
それじゃあ  
どうぞ気を付けて

これこれ  
忘れ物をしているよ

これこれこれ  
行ってしまったか

自分の顔を  
忘れて行くとは  
さても暢気な御仁だよ

まあ良いだろう  
持って帰った所で  
どうせ役には立つまいて

## 鷹考察論

---

鷹の新聞紙を開いて  
嘘字だらけの記事を読む

文字追うこの眼も  
如何物です

鷹のテーブルから  
鷹の湯呑みを持ち上げ  
鷹の茶を啜る

ああ美味い  
鷹の言葉を吐く

ところで  
鷹のあなたは  
鷹の舌先で  
鷹の心を織り  
鷹の暮らしを見ぬように  
やはり鷹の目隠しをして  
鷹の時間を数えるのでしょうか

それは大変に結構な偽りです

でしたら鷹の私も  
鷹の命を燃やしましょう  
大丈夫  
とてもとても  
似せてありますから

## ランプの魔神

---

砂漠と思われた

きめ細かく乾燥した砂が  
時々思い出したように  
ご機嫌伺いをする風の手を取り  
世界に壁を作っては  
また儂く地へ帰る

これはやはり  
砂漠と思われた

向こうの砂丘を越えて  
風鈴売りがやって来た  
だのに一つも音がしない

風鈴売りは  
ズボンのポケットに  
手拭いを突っ込んでいて  
風鈴の音はしないのに  
手拭いとズボンのこすれ合う  
衣擦れの音だけが  
不自然なほどによく聞こえる

私が見ていると  
買うのかいと  
風鈴売りは一言だけ口を開いた

私が黙っていると  
風鈴売りは手拭いを引っ張り出し  
汗を拭きながら立ち去った  
後ろ姿からは  
衣擦れの音も消えてしまった

手拭いの無い私は  
手のひらで額を拭う

すると何だか

ジャリジャリとする

風鈴を買っておけば良かった

私はとても後悔をした

## nostalgie

---

これで足りですか

女がそう言い  
紙幣を出した

異国の紙幣  
青いインキで  
不思議な形の  
不思議な建物が描かれた  
異国の紙幣

ぼんやりと受け取り  
ぼんやりと眺めていると  
俄に視界の隅々まで  
黄金色の田園風景が広がった

胃の腑の中身を  
全て吐き出してしまったのか  
そう思い  
慌てて両手で  
口を塞いだ

その時  
微かに笑ったのだ  
目の前の女が  
微かだが  
しかしはっきりと笑ったのだ

黄金色の田園が  
爆ぜる光の果実を集めたように  
見える世界を飾り立てる

女よ  
笑っておいて  
あんまり酷だ

それで今でも  
紙幣に描かれた  
青い建物を探しているのさ

## 足跡

---

配管工が  
パイプを担いで来た

こちらとあちら  
あちらとそちらを  
これから繋いでいくらしい

私が尋ねる

お前はこれまで  
どんなパイプを  
繋いできたの

配管工は答える

工事をしていると  
その事が楽しい  
工事をするのだと思うと  
期待と喜びで燃え上がる

配管工は  
己が何を繋いできたのか  
まるで理解していない  
工事の前の昂揚を  
工事の後には引き継がない

だから繋ぐのか  
いつもパイプを  
抱えたがるのか

配管工よ  
お前に通したパイプの形  
いつかはきっと  
思い出しなさい



## 思い出論

---

たくさん考える事ができないから

三つの事だけ考えた

三つの事だけで

暮らした

一つの事が一つ

二つの事が一つ

秘密の事が一つ

三つの事だけで

息をした

一つの事は

二つの事と

仲良しだった

一つの事は

秘密の事と

仲良しだった

二つの事と

秘密の事も

仲良しだけど

二つと秘密は

一緒になれない

一つの使命は

その時変わった

ある朝起きると

二つの事が

分からなくなった

次の日起きると

秘密の事が  
分からなくなった

たくさん考える事ができないから  
何が分からなくなったのか  
それも分からなかった

二つの事と  
秘密の事が  
一つの事を  
変えちゃったから  
今はもう  
一つの事も  
よく分からない

けれどもねえ君

二つの事は  
温かかったと思うんだ

秘密の事は  
今も秘密に思うんだ

だからねえ君  
たくさん考える事ができないから  
一つの事が何だったのか  
ときどきそっと  
囁いてはくれないか

西へ流れる風に乗せ

小さく

小さく

囁いては

くれないかな

## 空っぼ

---

空っぼの手のひら

握られる事を  
望んだ手のひら

力強い手が現れて  
優しい心を  
分けてくれる

空っぼの手のひら

握られても  
空っぼの手のひら

手のひらは知っている  
握ってほしいのは  
その手じゃないよ

優しさは尊いけれど  
その手じゃないよ

生まれ変わっても  
空っぼの手のひら

伸ばしてみても  
空っぼの手のひら

空っぼ  
空っぼ

ぽっぽっぼの手のひら  
豆はほしい  
だけどくれても  
ほしくない

ぽっぽっぽの手のひら

ぽっぽっぽ

ぽっぽっぽ

## 不治の病

---

手紙を送る

長い長い

手紙を書いて

あいさつも

近況も

世の中の事も

命の葛藤も

あなたへの気持ちも

何もかも

吐き出すように

書き込んで

流星の如く

飛んでくる

あの配達員に

手渡そう

手紙が届く

手紙が戻る

長い長い

手紙が戻る

送ってはいけない手紙だから

届けてはいけない手紙だから

出せない手紙は

封を切らずに

抽斗にしまおう

## ねがい

---

できるだけ長く眠る  
立ち上がる足を  
枯れ枝と交換したから

できるだけ長く眠る  
歩かなくても良いように  
振り返らなくて済むように  
命を忘れていられるように

できるだけ長く  
生ぬるい夢の中に  
眠っていよう

## 道半ば

---

光ったかい  
光ったよ

揺れたのかい  
揺れたとも

大きな雲だね  
美味しそうだ

雨は今日も降るのかい  
雨は毎日降るだろう

去り難いね  
去り難いさ

星から色を抜いとくれ  
横線一本足しとくれ

分隊長は髭面だ  
いいや剃れないだけだろう

慰問袋の縄を解け  
安全剃刀使いましょ

光ったかい  
光ったよ

帰りたいね  
帰りたいさ

星が一つである内に  
星の近くに居られる内に

光ったかい  
光ったよ



もうすぐ喇叭の  
時間だね

## 夏野菜

---

畑に植えた  
学級委員

畑に植えた  
ガキ大将

漬垂れ  
ガリ勉  
まとめて植えて  
早く実れと  
言葉を掛けた

夏に呼ばれて  
実った子供

だけどクラスは  
てんでバラバラ  
畑はちゃんと  
面倒見なきゃ

## うさぎ

---

月を見ていた

白銀色の波  
打ち寄せて  
宵闇と混ざる  
紫輝く肌

月の波に溺れれば  
この手も草木も  
皆同じ

蒼白い夜に  
染められて  
土もおでこも  
同じ色

漂ううなじに  
海月が集う

海月の色だけ  
ただ赤い

赤い海月は  
楽しげに  
聞こえぬ言葉で  
ぬらぬら揺れる

もうすぐ月まで  
届くかな

白銀色の波  
返されて  
宵闇を抱く  
紫煌めく空

月を見ていた

あなたを見ていた

## ひとつとひとつ

---

片耳を削ぐ  
一つの事だけ  
聞こえれば良いから

片眼を抉る  
余計なものまで  
見たくはないから

片腕をもぐ  
大事な指だけ  
繋ぎたいから

一つしかない口唇が  
それでも言葉で  
嘘をつく  
伝えたいのは  
たった一つの事なのに

## アネモネはまだ咲かない

---

出掛けに  
キッチンから声がした  
覗いて見れば  
オリーブオイルが  
私を呼んでいる

しかし時間が無い  
なぜ急いでいるのか  
どこへ行くのだったか  
まるで思い出せないのだが  
私は今すぐ  
行かねばならない

ならば話しは  
道すがら  
オリーブオイルを  
鞆に押し込む

駅に着くと  
駅舎を残して  
一面が海の中だった  
そういえば  
昨夜の天気予報で  
ゲジ眉の男が  
そんな話しをしていた

足の裏に  
オリーブオイルを塗って  
凧いだ海の上を歩く

駅舎が後ろに  
遠ざかる  
駅舎が彼方に  
消えていく  
見渡す限りが

水平線で結ばれる

金星が哀歌を口ずさむ頃

ムクロジの木が

見えてきた

右と左に

猪が居る

そっと目を伏せ

行き過ぎよう

何だか少し

疲れたようだ

オリーブオイルを

背中に塗って

今夜はここで

眠るとしよう

忘れないから忘れない

---

朝焼けの空よ  
夜半にむずかる  
嵐をなだめ  
熟れた乳房に  
旭日を抱えし朝よ  
汝が微笑みに  
束の間の忘却を演じよう

葬る心の片隅に  
騎士の心を書き記す

おお朝焼けよ  
猛りし川にも  
岸部の花に  
淡い夢見のあるように  
溢るる流れに  
接吻捧げ  
この身は花の名となろう

永久に触れるを憚るとても  
永久に香りの消えないように



## 殺意の杜

---

今夜はきっと  
ミミズが通る  
アタシを誤魔化すなんて  
絶対にできないんだ

今夜もきっと  
ミミズは通る  
ヒジの関節の内側の  
柔らかな所を狙って

今夜も今夜も  
毎日今夜も  
ミミズはアタシの  
腕を這う

切っても切っても  
毎日切っても  
ミミズがアタシの  
腕に住む

母さん  
そろそろ  
新しい剃刀を  
買いませんか

## 陽炎

---

この炎は  
温もりを与えない

終わり果てなき  
舞を連ねて  
踊り踊れど  
熱をも生まぬ

炎は揺らいで  
像を成す  
ただその為にだけ  
足取りを踏む  
汗の一つも  
流さない  
手振りの中にも  
愛など無い

常ならざる故  
炎であると  
冷たい吐息に促され  
空気がさわさわ  
噂した

## 二人旅

---

今朝は空いている  
いつも同じ車両に乗ってくる  
汗臭いオヤジもいない  
そのオヤジを迷惑そうに掻き分けてくる  
香水臭い女もいない  
けれど  
いつもの倍以上の時間が過ぎても  
列車はホームに入らない  
見慣れぬ景色を  
ぐんぐん追い越しては  
列車はまるで  
スピードを落とさない

定期入れには  
あの子の写真  
ボクを見るなり  
不安だろうねと  
心配をする

ボクは答える  
車掌が現れて  
君を見初めたとしても  
写真のキミは  
ボクのものだよ

吊り革にはアマガエル  
手すりにはヤマカガシ  
ボクの頼りは  
あの子の写真  
列車はまだまだ  
止まらない

## あの頃

---

蒲団は湿っている  
快晴に促され  
お天道様に挨拶させても  
蒲団はやっぱり湿っている

身体を預ければ  
せせらぎが聞こえ  
懐かしむ目頭に  
小鮒が大日経を書き写す

この目を通して  
世を見れば  
何もかも皆  
曼荼羅の中

ああ  
そうか

ボクはもうすぐ  
生まれるんだね

## savon

---

手が汚れている

キミがこの手を  
良い手だと言ったから  
二人で並んで  
夢中で汚した

手が汚れている  
もう汚せないくらいに  
手が汚れている

また二人で  
この手を一から  
汚せるように  
元の良い手に戻しましょう

それでサボンを手に取った  
濁った泡が手を包む  
汚れをすっかり  
浮き上がらせて  
香り微かに  
流れて落ちる

この手はいつかの  
良い手になった  
けれどもキミは  
ボクのこの手を  
知らないと言う

## 無関心

---

何でも許す

心から許せないものは

一つあれば充分

だから何でも許す

だから今

この引き金を引く

因

---

鯛の鱗を  
捧げたよ  
少しは見栄を  
張りたいからね

小銭を積み上げ  
身長を稼ぐ  
大きく見せなきゃ  
心配させる  
揺らぐ背丈に  
バランス取り取り  
やっぱり見栄を  
張りたいよ

それで言葉を  
売ったのさ

黙っているよ  
いつまでも  
そうして見栄を  
張るだけさ

## 渴望

---

部屋の隅で  
踏み台に腰を掛け  
烏天狗が香魚を呑む

もう七尾は呑んだ

すっかり日は落ちている  
これでは飛べまい  
今夜は泊まるのだろう

左足の親指  
その付け根の辺りで  
傑物が痛みを謳い  
聞き入る内に  
眠りの指先が掛かる

大きな赤子が  
盲の赤子を四人連れ  
犬より速く  
膝行って通る

声も立てずに  
キリキリと胃の腑を締め上げて  
空腹の拷問が始まるから  
腹を割くなら  
十文字が良い

人差し指と  
中指と  
薬指と  
小指と

親指だけは  
仲間外れにしなくちゃならない



身体の中の  
外側の  
本当の中の  
中の中の  
中の手触りを  
小箱に仕舞って  
季節外れになったなら  
そっと開いて  
中の中の  
本当の中の  
外側の  
匂いを嗅ごう

兜巾がずれる  
闇の翼が折れる

小さな老人が  
棺から這い出て  
膝行りの赤子を舐め回す

血が足りない...  
血が足りないんだ  
愛しき者よ

## 本当の音

---

高い声が出なくなったから  
人差し指と親指で  
頸動脈を引き出した

六つ並んだ  
一番右の  
ペグをクリクリ  
引き絞り  
真っ赤な弦を  
締め上げる

これならきっと  
歌えるだろう  
最後に一声  
響けば良いんだ

好きな歌  
楽しい言葉  
笑顔の行為  
ボクが欲しいのは  
どれでもないから  
求める誰かに  
あげちゃおう

その時見上げる  
誰かの瞳が  
ボクが望んだもののなのさ

頸動脈が  
波を打つ  
キリキリ絞られ  
高音を呼ぶ  
最後の声を  
響かせるため  
ボクを調律しなくちゃね

## カレーライス

---

キミを殺したい  
理由は知っているね

キミを殺せない  
理由は知っているね

道具はいくらでもある  
方法も熟知している  
だからキミを殺してしまいたい  
だってキミも  
望んでいるのだろう  
しかしキミを殺せない  
理由は知っているね

食卓には  
カレーライスと  
生野菜  
コップに注がれた  
ぬるい水

香辛料に包まれた  
鶏肉を奥歯で噛みながら  
コップに映った  
知人を眺める

歪んでいても分かる  
古い馴染みの顔

キミを殺したい  
キミを殺せない  
カレーライスは  
あと一口

## 代えられるもの

---

心から

心を込めて

心の底から

心変わりをするクセに

心躍らせて

心のままに

心確かな

心遣いに牙を剥き

心移りを

心豊かな

心通りと

心に諭す

それならば

心である必要が

あるのかい

## 自意識

---

腕をだらりと下げている  
と思えば  
肘の辺りから少しだけ曲がり  
その先で手首が  
やはりだらりと垂れている

膝は軽く曲がり  
顎は少し上げて  
全体的に気の抜けた印象

これは蜥蜴に相違無い  
然らばこの姿勢  
どう考えても彼奴である  
気が付いてしまうと  
否応無しに胸が高鳴る

ところへ蠅が迷い込む  
暫し間を置き  
蜥蜴は四つ足を下ろし  
こそこそと蠅を追っていく

首は暖かい方がよい

見送るその背に告げて  
いつかまた  
襟巻きを広げる姿を  
目蓋の内に夢想した

## 白玉か

---

笑っているのだろう  
それは知っている

はしゃいでいるのだろう  
それも知っている

自然な振る舞いで  
当たり前動く

眉や  
頬や  
唇や  
肩や  
腕や  
手のひらや

流れる今と  
流れた今と  
未だ見ぬ今と  
当たり前動く

抱く手を  
何処に広げたとしても  
抱いた手は  
命脈尽きるとて  
熱りを失くさない

だから朝露は  
今朝も静かに光る

笑っているのだろう  
はしゃいでいるのだろう  
白玉の宇宙に  
木霊を残しながら  
朝露は

今朝も静かに光るのだろう

## 異界の人

---

すれ違う

すれ違う

大きな鱗と

すれ違う

見る間にするする

すり抜けて

次の鱗も

すれ違う

黄金の瞳は

僕の視線とぶつかって

互いに気付いたはずなのに

すれ違う

すれ違う

涼しい顔で

脇を抜け

鱗は次々

すれ違う

見つめていたのは

僕だけなのか

すれ違う

すれ違う

すれ違ったら

振り返ろう

そして小声で

げこげこ鳴こう



## 色眼鏡

---

気が付くと

アナタがサングラスを掛けていた

ボクも真似して

サングラスを掛けた

気が付くと

アナタはサングラスを外していた

ボクも真似して

サングラスを外した

それだけの事

世界もボクも

何も変わらないよ

気が付くと

アナタはまた

サングラスを掛けていた

でも

それだけの事

互いの姿は

何も変わらないよ

## 人知れず

---

潮騒がまとわりついた日  
雑多な言葉の波  
ぼんやりと身を任せれば  
心地好い虚脱感  
けれども今日  
潮騒に確かな声を拾う  
打ち寄せるたくさんの言葉から  
愛の告白を捉え  
嬉しさに手を差し出すけれど  
間もなく潮が引いて  
愛しさはどこかの岸へと去って行く

潮騒はきっと  
遠い遠い昔から  
こうして思いを運んでは  
人知れずまた  
持ち去ってきたのだろう  
だから渚は  
こんなにも切ないのだ

浴室のドアを開けたら、お前、髪を洗っていたらう。

緑の黒髪が長く濡れて、首すじから背中まで張り付いて...そう。ペツタリと撫で付けられる様に、それでいて不規則に乱れ、シャワーが散撒く火照りの種に打たれる儘になっていた。

俺は最初、前室に走り込んでくる湯気に巻かれて、そこに居るのがお前だとは気が付かなかったんだ。

朦々と煙る視界の向こうで、シャワーがワンパターンの旋律を歌い上げているその中に、それでも矢鱈ハッキリと、お前の髪の毛だけが目に入った。

...死を覚悟したよ...

お前が俺に気付いて振り返るまで、そう...きっと一秒も無かった筈だ。でも俺は、その僅かの間に、浜辺の砂粒と同じほど沢山の命を、天へと返した心持ちだった。

お前が不思議な顔をして俺を見詰めた時、果たして俺は、本当にその場に居られたのかな...

その命は、俺の命だったのかな。

コックを絞ってもいないのに、いつの間にかシャワーは歌うのをやめていて、俺に聞こえるのは、ドクン、ドクン、という自分の心音だけだった。けれどそれも、何だかとても他人事のように感じられて...本当に俺の心臓だったのかな。

え...

似合わないって...確かに柄じゃないな。

俺はね、あの時から俺ではなくなったんじゃないかって、そう思うんだ。

いつまで

---

さよならと言われて  
貴方の瞳を  
覗き込んだの

幼い日の友達と  
また会う明日を約束して  
今日の日はさようなら  
貴方の瞳は  
それを疑わないみたい

だから私  
さよならとは返せないの

またね

掠れそうなほど  
ギリギリの声で  
それが精一杯

さようならには  
覚悟が要るわ  
また会う明日の約束が  
久遠の静寂に吞まれても  
慌てず  
騒がず  
懐かしむため

だから私  
そんな瞳に  
さよならとは返せないの

扉はいつでも半開き  
カギもかけずに  
私 煙草を吸うわ

貴方の瞳が

さよならを知るまで

## neuron

---

ペリペリだ  
またペリペリだ

頭の中で  
働き者が  
ペリペリをする

日に焼けた夏の終わり  
背中や肩や  
鼻の頭を  
ペリペリする様に  
あいつはせっせと  
頭の中で  
ペリペリをする

半月かけて  
半分ペリペリ  
もう半月で  
残りをペリペリ

月が巡れば  
頭の中は  
すっかり見事に入れ替わる

ペリペリペリリ  
ペリペリリ  
ペリペリペリリ  
ペリペリラ  
ラ...

おかしいな  
それでも消えない  
これはなに

ペリペリペリリ

ペリペリリ

あいつはせっせと

ペリペリラ

少しはこっちも

ペリペリしてよ

## 背中の匂い

---

星は瞬くのだそうだ

それならば

星の瞬きと

この目の瞬きを揃えれば

夜を暗黒にする事ができる

星だらけの夜にする事もできる

満天の星空を見上げ

ボクがどちらを望んだか

キミには

教えてあげないよ



日は遍く血を沸かし、和やかにして風を語る

---

影が揺れて  
揺らめいて  
それで知ったよ  
光の中に居る理由を

だから泣いたよ  
顎を反らして  
小鳥の様に

目尻から耳へ伝い  
やがて肩へと落ち  
鎖骨の窪みに集まっては  
苦しげに吐く息に驚き  
胸へと流れて去って

それでも泣いたよ  
目蓋の裏側が  
海と繋がってしまったから

影が揺れて  
揺らめいて  
世界が滲んで  
溶け出して

ずっと泣いたよ  
叫びたい言葉を  
押し殺したまま  
歯を食いしばって  
大っ嫌いな光の中で  
揺らいだ影を  
悲しみながら  
口の端だけ  
笑ったままで

それで知ったよ

影の心を

## 歳月の不公平

---

あなたを待って  
この場所で  
花をつけない  
木と成りました

肌はガサガサと  
たくさんの皺を刻み  
角質の一つ一つが  
或いは堅く  
或いは脆く  
盛り上がっているのです

そうしてできた隙間には  
小さな小さな  
虫達が這い回り  
それを啄む為に  
鳥達が集まり  
洞を見つけた小動物が  
家族を守ったりしています

恵みを与える  
温かく見守る  
そんな木の役目を  
信じているのです

もう あと百年  
あなたを待って  
あどけなきその信用を  
裏切ってやろうと思います

## 泣き顔はショパン

---

鎖を下さい。

それがお前の、最初の言葉だった。

左手に輪の様に束ねた鎖を下げて、そこから伸びた無機質な尾の先を右の掌の先でユラユラと揺らして、俺はその言葉を、しかしどこか遠い昔の話しを聞く様に、ただ流れて来るままに迎えては送り出していったのだ。

束ねられた鎖は無言の重厚感ばかりを訴える癖に、右の掌から先では、シャラシャラととても軽薄な言葉を繰り返して、甚だチャラチャラしている様に感じられる。

そのどちらもが、自分の身体の意志、指先の加減一つで変わるのだという事を理解していながら、俺には何やら遠い異国の話しほど無縁の物事の様に思われた。

鎖を下さい。

鎖で繋いで欲しいのです。

求めているのなら与えてやろう。

俺の右手は、何を考える事も無く、自然とお前の肌に鎖を打ち付けていた。

痛みと言うよりも、突発的な衝撃に跳ね上がるお前の身体に対して、皮膚は無秩序な鎖の愛撫を、貪欲にその身に刻み付けた。

見る間にお前は蚯蚓腫れの外套で身を覆い、赤々と腫れ上がった素肌からは、凍える事とは縁遠い、凶悪な熱気が走り出す。

命の美しさを見る様だったよ...

さぞや痛いだろうにと思う俺のちっぽけな憐れみは、打ち据えられる痛みよりも、打ち据える俺自身に眠る無自覚な愛情を見透かした様な、恍惚としたお前の瞳に扇情を奪われて、既に舵を選べぬ為体と成り果てていた。

繋いで下さいというお前の言葉が、俺を繋ぐ鎖になるなんて事を、あの時の俺には想像する余裕さえ無かったのだ。

それ程に俺は、ソワソワと落ち着かず、ピリピリと緊張して、お前を恐れるほどに愛していたのだ。

そして今、お前を結んだ鎖を解こう。

お前が望んだ鎖を、さも俺が望んだ事の様にして解き放とう。

そう...

俺は求められる事を愛したのだから...

きっと、これでお相子さ。

俺の素肌に、いくつもの蚯蚓腫れが浮かび上がった...

## 思い出の代償

---

右手の甲に何かが触れた  
...ような気がする

羽毛だろうか  
埃だろうか  
隙間を抜けた  
風の仕業か  
気のせいか

右手の甲に何かが触れた  
...ような気がする

触れたと思えば  
矢庭に広がる  
手の甲の違和感

吃音の皮膚が  
もぞもぞと主張するけれど  
まるで要領を得ない

分からないから放っておくと  
違和感が頭に乗り出す

手の甲は  
ちくちくとした  
かゆみに浸される

かゆみは次第に  
手の甲全体に広がり  
特にその中心は  
かゆさから臆て  
熱さを掘り起こした

灼ける  
手の甲が灼ける

肉が燻され  
ぶすぶすと煙を上げる  
火は噴かず  
ただただ熱い

到頭  
手の甲は熔け出した  
熱の中心から  
美しい円を広げては  
どろどろになった皮膚を  
ぐずぐずになった肉を  
中手骨の隙間へと流し込む

このまま  
手の内を通過させては  
裏側の手の平までも  
爛れさせてしまう

そうは問屋が卸すものか  
即座に左手を広げ  
右手の甲を包み込んだ  
...ような気がする

あれ...  
灼けていたのは何処だったろう  
もう少しで思い出せる  
...ような気がする

## 馴染み

---

二十年振りだな

感情が有るのか無いのか  
判別の付かない声で  
マスターが迎える

店内には  
いかにも常連という顔が  
何人か座っている  
しかし誰一人  
知った顔は無い

二十年振りだが

そう前置いて  
注文をする

いつもの

ややあって  
出されたグラスに口を付け  
初めてマスターが  
マスターの息子だと気が付いた



## 偽りと思い遣り

---

俺は名前を売ったのだ  
最初の男がそう言った

誰かが口火を切ると  
途端にみんなも語り出す

別の男は  
男であるという  
性別を売ったのだそうだ

すると  
後ろの方で  
控え目に立っていた女が  
男なら私も売ったと  
吐息混じりに話す

少し悲しくて  
だけど甘くて  
行き場のない吐息

みんな何かを売ってきた  
売らなければ  
手に入れられないと  
みんながみんな  
そう考えた

最後に少年が手を挙げた  
彼の隣には  
同じ年頃の少女が  
少年の手をしっかりと握って  
静かに付き添っていた

少年が口を開く  
けれども  
彼の口は

金魚や鯉のように  
ただパクパクと動くばかりで  
一つの言葉も生み出さない

やがて少年の口が止まり  
全てを代弁するように  
少女がゆっくり語り出す

彼は  
記憶の全てを売りました

嬉しかったり  
楽しかったり  
悲しかったり  
怒ったり  
はしゃいだり  
喧嘩したり  
冗談を言ったり  
理想を抱いたり  
恋したり  
憎んだり  
愛おしんだり  
呪ったり  
悔やんだり  
笑ったり  
叫んだり

いつ何をして  
誰と話して  
どんな夢を見て

自分を知る為に必要な  
時間の軌跡を  
彼はそっくり売りました

だから本当は  
彼はいま

どうしてここにいるのか  
なぜ記憶を売ってまで  
この場に来たのか  
その理由も無くしているでしょう

大人達は恥じ入り  
無言でその場を立ち去った

私はそっと  
少年に近付いて  
みんなが手に入れたかった  
小さな瓶を見せた

そしてそれを少女に渡し  
少年と私の前で  
満面の笑顔を見せたまま  
一息に瓶を呷る少女の  
細い喉を眺めた

## 縞縞の腕

---

雨に抱かれた日  
身体から滴る  
幾筋もの雫に溺れ  
放っても  
放っても湧き出ずる  
内腑を焼き尽くすような高熱に  
無自覚な囁きを演じて  
それなのに  
寒くて寒くて堪らずに  
腕を回して  
足を絡めて  
必死に震える姿を  
雨はきっと  
忘れてしまうのだろう

温かなシャワーを浴びて  
身体から滴る  
幾筋もの雫を見詰め  
高熱も生まず  
寒さも起こさぬ  
優しい肌触りに涙しても  
雨はきっと  
忘れた振りを  
するのだろう

## 白い真似事

---

嘘つきがやって来て  
たいそう立派な  
嘘を置いていった

嘘はいつでも  
二階の窓辺に腰を掛け  
中原中也を読んでいた

日の入りが早くなり  
嘘が二階から降りてきて  
デイデイ屋さんを呼び止める

下駄がきれいになったなら  
あなたに会いに  
出掛けよう

てふてふ

---

てふてふをみた  
せわしなくうごくはね  
それなのに  
とてもゆつたりとしたひこう

かぜにあそばれ  
ういてみせたり  
しずんでみせたり

てふてふは  
せわしない

てふてふは  
のんびりや

すばやいはねのうごきを  
じつとみつめていると  
うごいているはねなのに  
とまつたやうなもようが見える

それはあのひとのかお  
てふてふは  
あのひとのえがお

てふてふが  
せわしなくうかび  
のんびりしずむのは  
そこにあのひとがいるからだ

## 寒風斯く語りて不眠を誘う

---

嗚呼 薄汚れたお前

水垢塗れの向こうに曾ての輝きを偲ばせる

髪の毛だらけの浴室に這う蛇口の様に

薄汚れてしまったお前

研磨剤を優しく溶いて

少しずつ少しずつ

在りし日を掘り出そうとした所で

嗚呼 薄汚れたお前

金束子を持つ其の手にぶら下がる五匹の虫は

お前の願いなど意に介さず

只管に濁りを含んだ白糸を吐き出すのだ

もっと光を

もっと光を

もっと光をと叫んだ分だけ

お前の両手は糸に巻き取られ

臆て羽化を待つ蛹の様に押し黙るしかないのだ

薄汚れたお前

列車の吊り革に残る他人の温もりを喜び

生温かな感触の中に潜む未知の病原菌を夢見乍ら

街の灯りが遠離るのをじっと待って居る

薄汚れたお前

立ち並ぶ家家の表札を

一軒毎に口に出しながら帰る道道

擦れ違う巡査の視線に畏縮しつつ

斃れ狗め

胸の内に毒突いて

自らに怨み言を並べる理由さえ持たぬのに

嗚呼 薄汚れたお前

振り返り

振り返り

己の影を切り離せぬ苛立ちに

安酒の海へと漕ぎ出しては転覆を繰り返す

作り笑いが素顔のお前

洗面台に置き忘れた眼鏡を探し

薄汚れたお前

曇った世界を千鳥足で歩くのだ  
掻き切れぬ程に無数の痒みが背中を襲い  
狂おしさに目の玉が裏返ろうとも  
映し出されるのは曇り許り  
嗚呼 お前  
薄汚れたお前  
何千年と湯に浸かろうとも決して洗われぬお前  
其の口から漏れ出ずる吐息の色を  
せめて友と呼ぶ戯れを許すが良い  
五匹の虫を絡め合え  
濁った糸の渦を覗き込み  
曇り眼の優越感を奮い立たせて胸を張れ  
列車は今日もお前を運ぶ  
列車は今日もお前を運ぶ



おはよう

---

ニャアが笑う  
そんな所を歩いては  
何時迄経っても  
御釈迦様の掌の中さ  
ニャアは笑って尻尾を振った

だから寝ないで考えて  
朝日が昇る其の前に  
こっそり窓を開けたのさ

物干し台への階段を  
軋みを殺して静かに踏んで  
蟋蟀の唄に隠しつつ  
鋸ギコギコ挽いたのさ  
汗も掻かずに挽いたのさ

だからねニャアは  
無口に成った  
庭に散らばる  
木屑に塗れ  
崩れた足場と  
添寝をしてさ  
笑いもしない  
尻尾も振らない  
無口なニャアは  
迎も上品  
けれど何だか  
詰まらない

だから寝ないで考えて  
其の儘ずっと  
野晒しにした  
其の内屹度  
起き上がるよね

其れなのに  
ニャアは日毎に  
ぐんぐん腐る  
毛皮を残して  
どんどん痩せる  
臭くて逆も  
堪らない

通り次りの鴉が鳴いて  
ニャアの毛皮が腹から裂けた  
ドロドロに成った心が溢れ  
庭の小さな池へと沁みる

蓮の花が  
ぽおんと鳴った

何だ御前も  
掌の中  
僕は笑って  
ニャアと泣くのさ

## ドナドナの街

---

土瀝青が揺れる  
小刻みに揺れる  
遠くから  
軽銀の箱を従えて  
遠くへと  
秘密を運ぶ大きな車が  
躑躅して通って行くのだろう

軽銀の箱には  
一体何が詰まっているのだろうか

ゴトゴトと揺れる箱の中  
平積みにされた  
大量のグリモワール  
一番底の一冊は  
きっと本物の偽ソロモン文書

或いは  
南国から盗み出した  
ギラギラの太陽が詰め込まれ  
輝を摩る  
雪国の少女の手を  
暖めに行くのだろう

いいや若しかしたら  
雪国の少女を  
何人も  
何人も  
誘拐しては押し込めて  
ヴェスヴィウスの火口まで  
ゴトゴト走って行くのかもしれない

軽銀の箱には  
一体何が詰まっているのだろうか

溢れ出しそうな虚無  
吐きたくなる程の敵意  
無抵抗な悲哀  
在りし日の幸福

軽銀の箱には  
一体何が詰まっているのだろうか

本当に詰まっているのだろうか

軽銀の箱は  
実はすっかり空っぽで  
大きな車は  
ただ箱だけを  
遠くから遠くへと  
引き摺り回しているだけなのだ

それならいっそ  
沢山の薔薇を詰め込もう

花卉の色は全て黄色  
九百九十八本で  
乗り込む此の手の一輪だけは  
深紅の薔薇と洒落込もう

土瀝青が揺れる  
激しく揺れる  
遠くから  
軽銀の箱を従えて  
遠くへと  
秘密を運ぶ大きな車が  
砂塵を巻き上げ  
通って行った

朝露が葉に溜まる  
見えずとも分かる  
終夜蓄えた冷たさが  
魁ける陽光の兆しに沸き立ち  
湿気の喧しさが鼻に付く  
だから見えずとも分かる

焼け付いた喉は  
渇きの熱さを乗り越し  
未熟な筆箒を奏でる様に  
ひゅうひゅうと鳴るばかりで  
もはや本当に  
水を得たいと望んでいたのか  
それすら分からない程だが  
私は一晩待っていたのだ

ほら  
もうすぐそこの葉が  
背に負い切れなくなった雫を  
小さな弾みと共に  
私の口へと投下する

かさかさの口唇を  
ぎりぎりと開く

ところへ飛蝗が躍り込み  
水滴は遠く奪われる  
虫虻の顎が  
ぎちぎちと鳴る

お前さんには悟れまい

そう言い捨てて  
飛蝗はどこかへ跳ねて去る

私はもう一晩待つのか

もう待たないのか

何もかもが

どうでも良くなってしまった

## 撥条仕掛け

---

鏡の前に  
禿頭が三つ並ぶ  
店の親父が  
洗面を作る  
赤と  
青と  
白と  
振れた線が回る  
親父の思案は  
まだ続くだろう

通りには  
鞠が転がり出る  
髭面の嬰兒が  
這い蹲って  
追い掛ける  
蟻と  
砂と  
骨と  
素直な夢が踊る  
刹那を数えれば  
馬蹄が騒ぐだろう

あの山の中腹に  
深い深い洞がある  
むかしむかし  
偉い偉いお坊さんが  
とてもとても若かった頃  
十年籠もって  
只管泣いた

君に言いたい事がある  
君に知らせたい事がある  
蛇の皮を裂き  
鮮血を硯に受けて

愛しい君の  
名を書き綴り  
そうして今日も  
暮れていく

家家の門に  
灯りが入る  
腹黒い女房達が  
魚の腸を取る  
嘘と  
倦みと  
愛と  
遣り場の無い誠実が  
竈を灼くだらう

四更の頃に  
墓場で逢おう  
冷たい目玉を  
舐ってあげる  
そして二人で  
生きている振りを  
しようじゃないか



## 井中に沈む匣

---

夏だというのに  
薄氷の割れる音がするだって  
それはただの  
聞き間違いというやつだ

もちろん聞こえたとも  
だから聞き間違いだと言っている  
そもそも  
扉を開けて  
その目で確認したのかい  
していないのだろう  
確かに似ているけれど  
あの音は  
薄氷なんかじゃないのだよ

あれはそう  
空から降ってくるのさ  
そしてそいつが  
地べたに抱き付く時  
あの音がするのさ

そいつらは  
アンドロメダに潜む  
地球そっくりの星の  
新宿そっくりの街の  
薄汚れた横町の  
草臥れた飲み屋の  
麦酒そっくりな液体の瓶の  
栓を抜かれた  
その口を覗き込んで  
濁って見える程に透き通った  
自分と瓜二つの瞳を見付けて

「それじゃあ腹も減るだろう」

そう呟いては  
風の手を取り  
次々空から  
降ってくるのさ

嘘だと思うなら  
ほら  
その扉を開けてみな

ただし  
扉を開ける前と後とで  
世界が同じと思うなら

## 赤子に抱かれて

---

君が分け入れば  
川は紅を咲かす  
いつか大海へ届き  
潮の流れとなる為に  
だから君は  
母なる海の母  
真っ赤な生命が  
君を母さんと呼ぶ  
君は答えず  
向こう岸へ上がると  
濡れた着物もそのままに  
森の闇へと  
溶け込んだ

にああ  
にああ

川で赤子の声がある  
君の元まで  
連れて行かなくちゃ

にああ  
にああ

抱き上げるけれど  
赤子はすぐに水に溶け  
泣き声ばかりが  
木霊する  
狂おしい響きを胸分けて  
川を何処まで進めども  
あれほど見事に咲いていた  
真っ赤な生命を掬えない

にああ  
にああ

赤子の声が大きくなる  
耳朶をよじ登り  
目の裏の辻で  
蝸牛と噂話を始める  
喉の奥から  
得体の知れない衝動が  
こぼこぼと音を立てると  
思わず口から声が出た

にああ  
にああ

森から君が戻ってきて  
岸辺で涙を流している  
泣いている  
笑っている  
怒っている  
分からない

川が歌い出す  
赤子が歌い出す  
憎しみを歌い出す  
でもそれは  
君に向けられた歌じゃない

呪いの歌を聞きながら  
ちょっと過去まで  
出掛けてくるよ

## 招かれた宴

---

目が覚めたから  
もう一度眠る  
けたたましい鶏は  
唐揚げにしよう  
悪夢の続きを流し  
紙袋を被ったら  
彼奴の後ろでこっそりと  
赤錆だらけの斧で  
西瓜割りをするんだ  
ポラリスがデネブに刺され  
ベガが静かに北叟笑む  
船乗り達は帰って来ない  
港は枯れ木で埋まり  
風がぴたりと止む  
黒猫が音も無く歩き  
三步に一枚  
お腹の傷口から  
ビスケットを転がす  
乳離れをした  
老け顔の幼児が四十四人  
お行儀良く列を作って  
ビスケを拾って歩く  
最後尾にはまだ  
一枚も渡らない  
ワイン片手に詩人が喚く  
隣で恋人が涙するから  
全部まとめて  
箒で掃いた  
失くした指輪が見付かって  
機械のあの子は背が伸びた  
泥から突き出た望遠鏡は  
相も変わらず  
果心居士の背中に生えた  
八本の節足に焦点を合わせている  
そろそろお米が炊けそうだ

温かいご飯を盛って  
この梁の高さを測ろう  
立ち上る湯気に  
真っ新たな縄を掛ける為に

## 小指の思ひ出

---

真鍮の獅子が  
木製の扉を殴打する  
出迎えれば  
撫子色に包まれた  
厚紙の小箱が  
恥じ入る様に立っていた  
其の時感じた愛おしさが  
何うにも斯うにも気に入らなくて  
荒荒しい手付きで  
小箱の秘密の封を解くと  
中では小指が  
蝶を夢見る芋虫の様に  
のそりのそりと這っていて  
一途な想いを食べている

不意に  
君の顔が見たくなって  
地下室の鍵を回す  
三年振りの  
黴臭い空気が  
どんよりと動き出して  
君の裸体を運んで来る  
何て白くて  
美しい肌なのだろう  
神々しさに怯えながら  
その柔肌を  
丁寧に丁寧に  
ゆっくりゆっくり  
剥いでいこう  
狂った様な  
狂っている様な  
狂ってしまった  
君の言葉が  
今なら逆も  
滑らかに理解出来るよ

心配は要らない  
もうすぐ小指は  
蛹に成るさ  
だからおやすみ  
目を覚ます迄  
傍に居るからね



## ラブリュス

---

欲しがりな君は  
自分が誓いを守れる間だけ  
永遠を求めるんだ  
正直な彼は  
君に捧げた永遠の為  
今日も棧橋で  
安楽椅子に揺られている  
君の今が晴れならば  
彼の永遠との境目に  
綺麗な虹が出続ける  
素敵だね  
君はそう言って  
虹を欲しがるだろう  
キャンバスいっぱい  
絵の具を塗りたくって  
鮮やかで美しい虹を  
独り占めにするんだ  
僕は二人に  
犯行予告を出すよ  
君の七色の中心から  
緑色を拝借して  
彼が揺れる棧橋からは  
雨を一滴頂こう  
緑と雨を小瓶に詰めて  
迷宮深くに隠すんだ  
誰にも見付からない  
見付けられても  
帰れない  
隠した僕も  
帰れない  
誰も戻らぬ迷宮で  
永遠だけが  
守られる

## 百々目鬼

<http://p.booklog.jp/book/102137>

著者：深沢幸弘

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yukiyukisan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102137>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102137>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ